

【一般口演2】 第6席**黄帝三部鍼灸甲乙経序に就いて**

兵庫 山本 恵美子

本稿は現存する最古の鍼灸学専書の《鍼灸甲乙経》序文を訳出し、其の概要を述べて、若干の考察を加えるものであります。

《黄帝三部鍼灸甲乙経序》は第一に晋・玄晏先生皇甫謐の署名のある序文、第二に《新校正黄帝鍼灸甲乙経序》として高保衡・孫奇・林億等が記録した序文、第三に序例として本文の内容に就いての制約・条件と灸刺法の分別を述べ、明・新安・呉勉学が校正しているものであります。

我々鍼灸家が古典専書に対する時、先ず逢着する漢文の陰峻・難解・誤訳等は避けられない。現在は多くの校注・注釈・訳釈・語訳・評釈、また工具書（辞典・詞釈・医学史・医籍目録）を入手する事が可能である。わが国でも《素問》《難経》《傷寒論》《金匱要略》《脈経》等の諺解本が江戸期享保年間（1726～1736）に発刊され、後世の学生を裨益した事は否めないものであります。

《鍼灸甲乙経》の和刻本が無く、初学の頃は、台北版の影印のみにて、訓点も無く読解に難渋する日々でした。1978年に中国・山東中医学院・徐國仟老師と書信交流が始まり、多大な教示を受けました。1979年には《鍼灸甲乙経校釈》が発行され、爾来研鑽を続行して今日に至った次第であります。

茲に私の作業の経緯を述べて、本稿の抄録と致しました。